

松尾邦之助余聞 その1 — 川路柳虹 —

江 口 修

松尾邦之助については研究としては終了したつもりでいたが、ひとつだけ報告すべきことと判断される資料が出てきたので、余聞として二回程度で紹介して置こう。フランスの古書店から取り寄せた雑誌に *Latinité* というものがあった。邦之助がこの雑誌に日本の現代詩人を紹介しているということが購入の動機だったのだが、7ページと少ない分量だったので放置していた。しかし改めてこの雑誌の性格を確認してみると、1929年から32年までの4年間に37号発刊して終わった短命の雑誌であるが、編集責任者はジャック・レイノー (Jacques Reynaud) で『フランス詩選』 *Poésie française*, Lyon, I.A.C., (1943) などを編纂している詩人である。さてこのジャック・レイノー、思想的には王党派 (Royaliste) でシャルル・モーラスに近い右翼である。雑誌のタイトルも古代ギリシャ・ラテンの直系を自認したものであり、十七世紀ブルボン王朝時代を理想とする立場でもある。ここでひとつ気になることがある、あまり確証が持てることではないのだが、すでに *Les Haikai de Kikaku*, Paris, éd. Crès, 1927 によって、日本詩歌の翻訳家として名を馳せていた松尾は常に翻訳協力者としてオーベルラン (Steinilber-OBERLIN) の名を掲げていたのだが、この短い翻訳は松尾単独で日本語から直に訳されたものと末尾に記されている。つまり、オーベルランはこの雑誌への寄稿を承知しなかったのではないかと考えられるのである。ではなぜ邦之助は単独で翻訳し寄稿したのだろうか、その事情を垣間見させてくれるのが、取り上げた3人の日本詩人の筆頭が川路柳虹であるということではないだろうか。柳虹は1927年にフランスに「遊学」しているが、松尾の自伝的回想録『風来の記』によると、この『其角の俳諧』が出版されたときの出版記念会を兼ねた「日本人の会」について川路が『平遠随筆』で語っていることを延々と引用しているⁱ。オーベルランも当然出席していたが、

オーベルランは、最近、岩村英武という人と共訳で、日本の小唄を紹介し、^{ジャンソン・デザイン}『芸者の唄』として出版した人。この題は少し安っぽいが、内容は”松の葉”や、その他の著名な小唄を訳し、よくその精神を伝えたことから、アンリ・ド・レニエなどは口をきわめて激賞し、日本人のもつ簡潔ななかに含蓄された優しい抒情のユミリテ (謙虚さ) をいかなる詩歌にも見出しがたい特質として推奨していたが、このオーベルラン氏は、また松尾君の“其角”においても多分に翻訳上の助言をあたえてくれた人である。ⁱⁱ

この箇所松尾は次のような「註」をつけている。

仏文壇の巨匠アンリ・ド・レニエ氏は、この『芸者の唄』は叙情詩として、最も優れた宝玉であると『フィガロ』誌に書いていた。わたしは、オーベルランの協訳者だった岩村英武という人を全く知らないが、この岩村という、どこか金持ちの息子さんがパリを去ったため、彼に代わってオーベルランと協力するようになった。ⁱⁱⁱ

岩村英武は調べる限りでは美術雑誌にフランスの印象記などを寄稿しているようだが、詳しい経歴は分からない。とにかく日本詩の紹介はオーベルランの企画であったようで、松尾にとって

は降って湧いたような『キカク』話だった。川路は帰国後松尾の紹介記事を読売に寄稿したりしていたが、さらに父の危篤で急遽一時帰国した邦之助が読売の文化部長清水弥太郎を連れた川路柳虹と市電でばったり出会ったことが、松尾読売正社員への道の発端であった。「『其角』の仏訳に深い関心を持ち、その後も、わたしの仏文による日本紹介の仕事に協力してくれた熱意」^v二人の関係はその後も続いている。オーベルランの協力を得られない場合も、まだまだ収入の乏しかった邦之助は、ポール・ヴァレリーやフランシス・カルコらといった寄稿者の顔ぶれからして、日本文化の紹介のチャンスでもあり執筆を引き受けたのではないかと推測される。そこでこの *Latinité* 誌上で紹介された詩人の作品の原詩を確認しようと調べ始めたのだが、以外とこれが困難であった。しかしその過程で思いがけない発見もあった。まず原詩と訳詩を併記して紹介しておこう。確かに昭和に入りたちまち虐殺の憂き目に合う大正浪漫の抒情が息づいている。

Soir de printemps

Je voudrais étreindre le printemps.
 Quelle tristesse d'être seul
 Ce soir de printemps.
 Et pourtant, si nous étions tous les deux,
 Je regretterais aussi des choses...
 Décidément les regrets me hantent
 Ce soir de printemps !

春のよひ^v

いだきしめたき春の宵
 ひとりにおしき春の宵
 おもひはたせばおしまるる
 こゝろのこりのはるの宵

Choses oubliées

Une flaque d'eau
 Laissée sur le sable,
 C'est un oubli de la vague.

 Un nuage égaré
 Sur les monts lointains,
 C'est un oubli du vent.

 Une plume d'argent,
 Tombée, au hasard, sur la terre,
 C'est un oubli de l'oiseau qui passe.

 Le besoin
 De rêver et de regretter,
 C'est l'oubli des jours et de la jeunesse

忘れもの^{vi}

砂地に出来る
 水溜、
 波が海への
 わすれもの。

 はるか山に
 うかむ雲、
 風が空への
 わすれもの。

 落ちて甲斐なき
 銀の羽根、
 鳥が旅路の
 わすれもの。

 夢みかなしむ
 歌のくせ、
 わが若き日の
 忘れもの。

さて、選訳された詩人は川路柳虹、西条八十そして北原白秋であるが、八十と白秋の原詩同定は比較的簡単にできたが^{vi}、柳虹は簡単には行かなかった。閲覧可能な原資料が乏しいからだが、幸いなことに、北海道文学館に高橋留吉文庫が所蔵されていることが判明した。なんとこれが近代詩の豊かなライブラリーで、保存状態がすこぶる良く、しかもすべて閲覧可能である。柳虹では単行本詩集14点と新潮社版現代詩人叢書所収の『預言』の計15点が確認できた。それでも上記の2篇の詩を確認できたのは、偶然古書のインターネット検索で見つけた詩集『はつ戀』によってであった。しかしこの調査は無駄ではなかった。高橋留吉文庫の『黒い蝶』の奥付を確認しようとページをめくって行くと、付録として巻末に掲載されている「日本現代詩人 川路柳虹論」の筆者を見て驚いた。リオネッロ・フィウミ (Lionello Fiumi) ではないか。まさに松尾のイタリア人同志ともいうべき文人である^{vii}。この付録はあきらかに、川路と松尾が緊密に連絡を取り合っていたことの証左であろう。雑誌「フランス・ジャポン」の発刊が1934年の10月であるから、それ以前からフィウミと知り合っていたことになる。そこでLatinitéの寄稿者一覧を見るとフィウミの名が挙がっていた。つまりフィウミが松尾を寄稿者として推薦したのではという推測も成り立つのだ。フィウミは1924年から1940年までパリに住み、30年から4年間はパリ・ダンテ協会の事務局長を任せられ、伊一仏二か国語雑誌のDanteの発行も行ったが、巻末の注によればこの柳虹紹介記事はまさにこのパリで発行の「ダンテ」誌とイタリア北部の地方紙クロナカ・プレアルピナ紙、Cronaca Prealpinaに35年3月に掲載されたとなっている。つまり松尾が川路の久々の詩集発行を聞きつけて、それに合わせてフィウミに川路が日本現代を代表する詩人であり、彼の幾つかの詩編を伊語、仏語で紹介し記事にするよう依頼したのでであろう。記事は詩が伊訳ではあるが、「ダンテ」誌からの翻訳であることは間違いない。松尾が訳したとは書いていないが、少なくとも松尾から川路に記事かあるいは雑誌本体が送られていたことはほとんど確かであろう。36年の3月に出された記事が同年の5月に印刷に掛けられた詩集『明るい風』に載ったということは驚くべき早業であり、川路がこの紹介記事にいかにも狂喜し、あるいは印刷をぎりぎりまで延して掲載にこぎ着け喜んだであろうことは想像に難くない。いよいよ戦争へと駆り立てられる世界情勢の中で、抒情の火を再び掲げようとした最後の試みの一つとしてこの詩集は再読され、その他の日本近代抒情の再検討のきっかけとなってしかるべきかと思う。フィウミもぎりぎりまでパリに残るが軍靴の音高まる中、40年にはイタリアに帰国する。黄金時代は遙か昔となったパリで松尾とフィウミは最後まで文化の国際化とそこに未来を託そうと奮闘したのである。

さてフィウミの柳虹紹介記事に引用された詩編をみて再度驚くことになった。Latinitéの松尾が紹介したものにさらに数編を付け加えたものになっているからだ。フュチュリスモと陰翳美を融合させようとしたフィウミにとって日本の短詩形は大いに靈感を与えられるものであったようだ。

…彼は伝統的な詩へ爆弾を投じたのである。一九〇八年「詩人」九月号に発表した「塵塚」その他の詩によって彼は一躍有名となり又その詩は大問題を起こした。乃ち彼の爆弾動議によって新しい詩の仲間は覚醒し爾後の活発な詩の運動に入った。服部嘉香、島村抱月らはウオルト・ホイットマンやラドヤード・キツプリングを引用してこの新詩を声援した。

彼の起こした詩の革命が一般の検討吟味を促したのは自然である。その運動者は北原白秋が言ったように「詩歌解放運動の烽火」を揚げたのは当然であり、彼らの作品が今度のアントロジーに収めるに至った輝かしい革命の最初であったのである。^{ix}

そして最初に引用されるのが先に掲げた「春の宵」であり、「日本に全く新しい芸術を与えた」^xと絶賛されている。次が「忘れもの」、続いて花木を扱った詩群であるが、ここには松尾が紹介した「スイートピー」と「葡萄」はなく、しかも題名は一致するものの内容の異なる詩編しか見いだせていない。その後には松尾も載せている「竹」がくる。松尾の介在なしにはほとんど考えられない構成と理解である。

死がこゝにいたなら、
しっかりと「生」を握ろう—
おまへにとられないために。

死がむかうにいたなら
ぢつとして話をしてみよう—
鏡にうつる姿と話をするように。

死がしづかにやつて来たら
快く眠ろう。たつたひとり—
ちがつた朝を迎かえるために

「中学時代から知っていた」^{xi}川路柳虹との1930年代、非-飛行機時代における日仏の距離を超えた関係の深さはある意味で感動的である。読売新聞の正記者として「フランス・ジャポン」も編集するという、いわば風雲急を告げる時勢のハリだからこそ許された松尾邦之助の日本紹介だが、オーベルランとの共同作業の集大成ともいべき『現代日本詩人選』については、いま少し探究してのち「余聞」の続きとして本誌で発表しようと思っている。

i 松尾邦之助、『風来の記 大統領から踊り子まで』、東京、読売新聞社、1970年、pp.22-30.

ii 同上、p.25.

iii 同上

iv 同上、p. 32.

v 川路柳虹、『はつ戀』(第3版)、東京、玄文社、1921年、p.44.

vi 川路、『明るい風』、東京、村上信義堂、1935年、pp.3-5.

vii 八十と白秋について原詩のタイトルと訳詩の仏語タイトルを掲げておく(掲載順)：

西条八十、「海にて」、Devant la mer、「薔薇」、Rose、「なげきたまひそ」、Ne te plains pas、「玩具の舟」、Le petit bateau、北原白秋、『思い出』より「序詩」、Souvenir、「夏」、L'été、「密偵」、Espion secret..このうち後の『現代日本詩人選集』にも採用されているのが「夏」である。しかしその訳文は相当に変わっているので原詩と2つの訳詩を紹介しておく。

夏

近景ニ一本ノ葦、
遠景ニ不ニノ山、
不ニヨリモサ_ラニ高ク、
新鮮ニ葦ハ戦_ゾゲリ。

松尾邦之助余聞 その1

L'été (1931年)

Un seul roseau se dresse,
Au fond, le mont Fuji se dessine.
Ce roseau isolé, d'une fraîcheur étrange,
Tremble au ciel,
plus haut que le Mont Fuji.

ibid (1939年)

Dans le premier plan, un roseau,
dans le fond, le Mont Fuji.
Plus haut que le Mont Fuji,
ce roseau fraîchement frissonne.

二人は共著で1935年に *Poeti giapponesi d'oggi*, 『現代日本詩人』を出す。内容の多くはオーベルランとの共著 *Anthologie des poètes japonais contemporain* (1939年) と重複しており、後者の序文は川路柳虹の手になるものである。つまり30年代一貫して3人は日本文化紹介で協力し合っていたと言えるであろう。

ix 川路柳虹、『明るい風』、東京、村上信義堂、1935年7月、付録、pp.2-3.

x 同上

xi 前掲書『風来の記』、p.32. もちろん読者として「知っていた」のであり、付き合いがあった訳ではない。